

# 愛知県の絶滅危惧生物についての豊橋市自然史博物館 特別企画展（2005年）における観覧者調査報告

藤原直子\*・長谷川道明\*・井澤伸恵\*・安井謙介\*

An analytical report on survey of attendance at the Special Exhibition (2005)  
of the Threatened Wildlife of Aichi at Toyohashi Museum of Natural History

Naoko Fujihara\*, Michiaki Hasegawa\*, Nobue Izawa\* and Kensuke Yasui\*

## はじめに

豊橋市自然史博物館では、2005年（平成17年）7月15日（金）～9月11日（日）の52日間の日程で、第20回特別企画展「よみがえれ！愛知の生きものたち」と題して、愛知県の絶滅危惧生物をテーマとした展示を行った。地球環境の悪化と、それに伴う生物多様性の危機は、マスコミにも大きく取り上げられ、今日人類が抱える問題の中でも特に関心の高いものの一つである。豊橋市内でも多くの小中学校で、総合学習の課題としてこの問題が取り上げられ、豊橋市自然史博物館にも毎年、絶滅危惧種に関する質問や出前授業の依頼がある。まさに時を得たテーマであったといえる。しかしながら、期間中の観覧者は、8,588人、一日当たりの観覧者数に換算すると165人と、豊橋市自然史博物館において開催された過去5年間の特別企画展の平均観覧者15,476.8人（一日当たりの観覧者平均276.2人）と比較して、残念ながら明らかに低調な結果に終わった。

特別企画展の概要ならびに会期中来館者に対して実施したアンケートの集計結果については、豊橋市自然史博物館年報第18号（豊橋市自然史博物館、2006）において、すでに報告されているが、本稿では、年報第18号では報告されていない、難易度に関するアンケート結果、ならびに会期中に博物館実習生の課題の

一つとして行なった観覧者の導線、見学時間などの調査結果から、この特別企画展における観覧者の反応と評価について分析する。

## 導線調査

### 1. 調査方法

調査は、2005年7月23日（土）に特別企画展会場内で任意の観覧者を入場から退場まで追跡し、会場平面図（第1図）に動線を記入して、滞在時間、立ち止まりよく観覧した展示物、同伴者と会話がみられた展示物を記録した。また、観覧後にインタビューを行い、面白かった展示はなにかを聞き取った。調査には、博物館実習生11名があたった。

### 2. 結果と考察

27組について調査結果を得ることができた。27組の内訳は、幼児・小学生をともなう家族連れが21組（77.8%）、大人のみグループが4組（14.8%）、子どもみのグループが2組（7.4%）であった。

平均観覧時間は23.3分（最大45分、最小10分）であった。同様な調査で、過去5回（1997年～2002年）の当館特別企画展の平均観覧時間は28分である。本特別企画展の平均観覧時間はそれに比べると約5分短かった。

この平均観覧時間の短縮は、展示そのもの、例えば

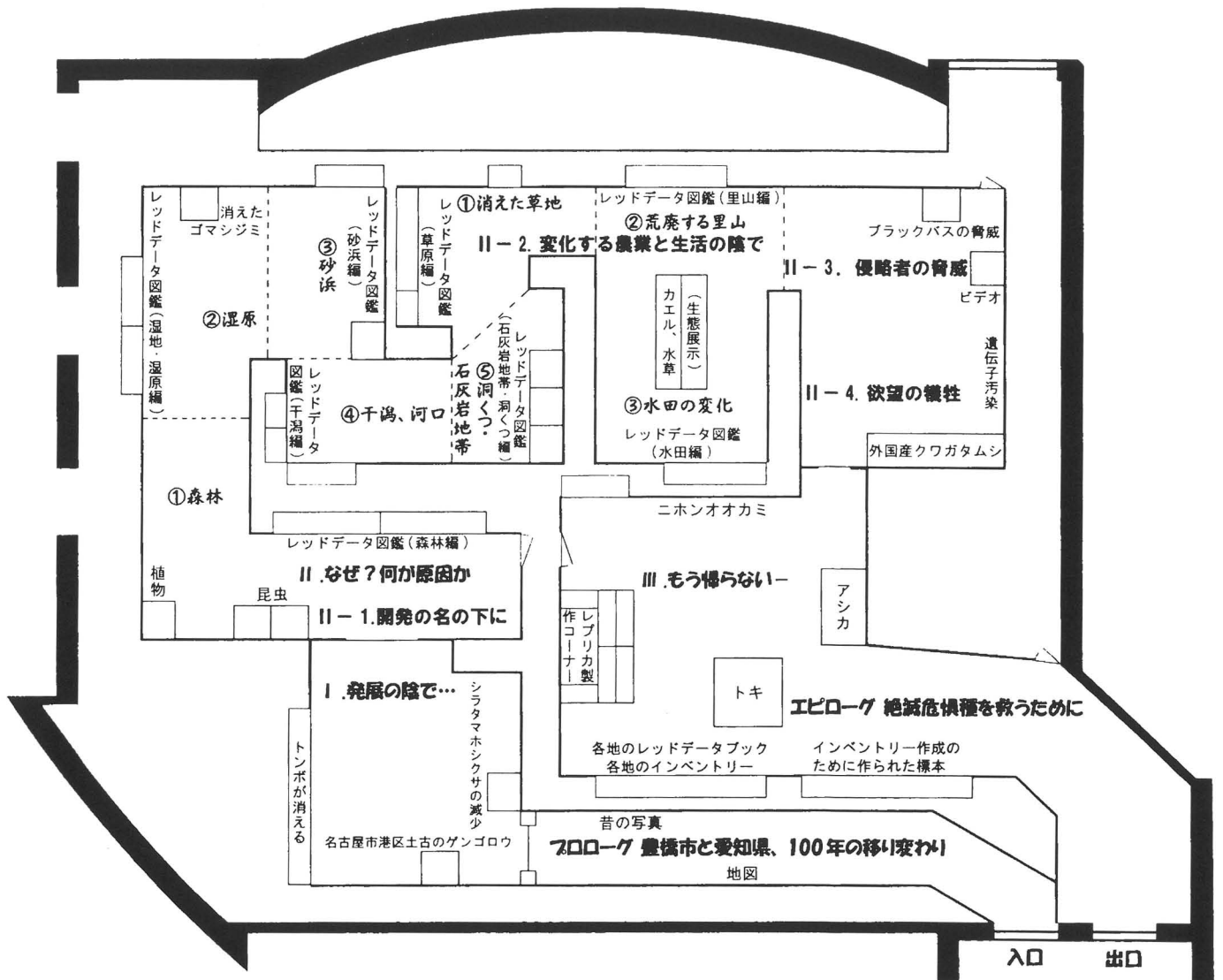
\* 豊橋市自然史博物館, Toyohashi Museum of Natural History, 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi 441-3147, Japan.

原稿受付 2007年1月6日. Manuscript received Jan. 6, 2007.

原稿受理 2007年2月16日. Manuscript accepted Feb. 16, 2007.

キーワード: 豊橋市自然史博物館, 特別企画展, 絶滅危惧生物, 動線調査, アンケート調査.

Key words: Toyohashi Museum of Natural History, special exhibition, threatened wildlife, traffic diagram research, questionnaire.



第1図. 2005年特別企画展会場平面図.

展示物の量, 展示物に対する関心度, 展示の難易度などの違いによって生じた可能性が高いと考えられるが, そのほかに調査の不利によって観覧時間がやや過小評価されている面がある. 今回の観覧時間の調査では, 観覧者が会場出口近くのオオカミの歯のレプリカづくりで粘土模型をつくりあげた時点で調査を終了している調査例がいくつかある. 観覧者は粘土模型が焼成するまでの待ち時間を利用して再度展示を見る例が多かったが, これらの例では観覧者の待ち時間内の観覧は観覧時間に加算されていない.

#### ①来館者が高い関心を示した展示物について

観覧者が高い関心を示した展示物, すなわち「立ち止まり特によく観覧した展示物」「同伴者と会話がみ

られた展示物」「聞き取り調査結果」は, 第1表のとおりである. 観覧者の関心度を指標する3項目の調査結果すべてで関心度の高い展示物の大部分は共通していたが, 関心度の順位に若干の差異が認められた. 絶滅種を紹介するコーナーで展示したニホンオオカミの全身骨格の3指標における順位の違いはこの例である. 面白かった展示物の聞き取り調査は, 展示物を見終わった時点での観覧者の印象の強さを示しているように思われる. その順位と, 実際に観覧者がよく観察した展示物・同伴者との会話があった展示物の順位が一致しないことから, 以下の2点が推察される.

まず, 観覧者が観覧前から高い関心を持った展示物は聞き取りの際にも挙げられやすいことを示唆していると考えられる. ニホンオオカミは代表的な日本の絶

第1表. 2005年特別企画展動線調査において観覧者が高い関心を示した展示物.

観覧者が立ち止まり特によく観覧した展示物, 同伴者と会話が見られた展示物の記録および, 面白かった展示は何かを聞き取って得られた回答を全ての調査票から集計した結果. 聞き取り調査結果では, 回答されたキーワードが単独の展示物ではなく複数の展示物(展示コーナー)をまとめて差している例を含む可能性がある.

A. 立ち止まり特によく観覧した展示物 (N=57)		B. 同伴者と会話が見られた展示物 (N=50)		C. 聞き取り調査結果 (N=29)	
クワガタムシ	10	ツキノワグマ	8	クワガタムシ	10
ツキノワグマ	9	クワガタムシ	6	ニホンオオカミ	5
トンボ	7	昆虫・トンボ・タガメ	各5	ツキノワグマ・昆虫	各3
地図や写真	6	ウミガメ	4	地図や写真	各2
ブラックバス	4	地図や写真・貝	各3	タガメ・トンボ・昔いた生きものすべて・洞窟の生きもの・ウミガメ・貝	各1
ニホンオオカミ・タガメ	各3	ニホンオオカミ・コウモリ・湿原の植物	各2		
湿原の植物・ウミガメ・石巻山の陸貝	各2	ブラックバス・剥製・レプリカ・チョウ・テントウムシ標本・秋の七草	各1		
標本作り・インベントリー作製・貝・昆虫・ゲンゴロウ・生きた昆虫・石巻の植物・植物標本づくり・コウモリ	各1				

滅動物であり, さらに目玉展示物として広報媒体に大きく標本写真を掲載したため, 観覧前から観覧者が強い印象を持っていた可能性がある. ニホンオオカミ以外の例では, 遺伝子汚染(遺伝的な攪乱)を紹介する目的で展示した外国産クワガタムシがいずれの指標でも上位に位置した. これは, 展示内容そのものよりも, 現代の幼児・小学生の一般的な嗜好を示した結果と考えられる. 過去に当館はクワガタムシをテーマとする特別企画展を開催(1995年)したが, この特別企画展観覧者数は44,980人で過去の生物学分野(地質・古生物学以外)をテーマとした当館特別企画展のなかで最多である. このことは, この推論を支持していると思われる.

つぎに, 展示の位置や展示ケースなど展示物の見せ方の違いによって観覧者の目に止まりやすいかどうかの差がでたと考えられる. ニホンオオカミ展示は順路に従い進んできた観覧者の進行方向と逆向の壁面に位置したため, 観覧者のグループが自然に立ち止まって展示の前に集まることは難しかったかもしれない. さらに, ニホンオオカミの展示位置はオオカミの歯のレプリカづくりコーナーと隣接していた. 幼児・小学生をふくむ家族連れ21組中11組の動線は, ニホンオオカミや周辺のその他の展示物に一切立ち寄らないで最初に体験コーナーへ歩み寄るものだった. そのため「観

覧者がよく観覧した展示物」, 「同伴者との会話があった展示物」の2項目では順位が低かった可能性がある. 体験コーナーでは, ニホンオオカミ標本を指し示してレプリカの解説を行ったため, レプリカの作成中または作成後に標本を見た観覧者が多かったと考えられる.

つづく4~5位で共通してみられたのは導入部に環境の時代的变化を紹介するために展示した「地図や写真」で, 3つの指標でのべ11件があげられた. このうち, 8件は大人から得られた結果で, 子どもを対象とした調査例でも同行していた親が写真をなつかしんで子どもに話しかける様子が見られた.

## ②「4つのミッション」(参加体験型展示)について

参加体験型展示の目玉であった4つのミッション(第2表)は, 27組中24組(88.9%)が体験していた. 3つの調査項目の合計で比べると, クワガタムシのクイズ(51件)がもっとも好評で, イヌノフグリのクイズが30件, ハマグリのクイズが25件, オオカミの歯のレプリカづくりが15件であった(第3表). クワガタムシと比べて知名度が低いと思われるイヌノフグリやハマグリも観察例・回答例が挙げられた. 「ミッション」という仕掛けを用いることによって観覧者の関心度が低かった展示内容でも十分な観察をうながす

成果が得られたといえるだろう。

感想及び観察記録の自由記述にもミッションにふれたものが多かった。ミッション参加者を対象とした絶滅危惧生物のカード配布は幼児・小学生に好評（4組）だったが、課題の消化だけが目的となり、その他の展示物に関心が向けられないという記述が目だった（6組）。このことが、観覧時間が短かった原因の1つであった可能性もある。

### 展示の難易度と反省点について

会期中に一般観覧者を対象に行なった記述式のアンケート調査では、330人から有効回答を得た。この中で、満足度については、「とても面白い」または「面白い」という肯定的な回答が88.5%あった（豊橋市自然史博物館、2006）。過去5回（2000年～2004年）の当館特別企画展における同様の調査結果の平均値は89.6%であり、数値自体は決して低いとはいえない。しかし、展示内容の難易度では、「難しかった」または「やや難しかった」と答えた観覧者が45.8%にのぼり、「適切」と答えた観覧者46.4%とほぼ同数の回答であった。これに対して物足りなさを感じた観覧者が7.9%でしかなかった。これらの値からみると本展示に対して観覧者が感じた難易度は総じて高かったといえる。

観覧者に展示が難しかったと感じさせたことに対す

る反省点としては以下のことがあげられる。

- ・展示物である絶滅危惧種の多くは、一般市民への知名度が低く、また、小型で地味な存在であったこと。このことは、人気を博した展示物が知名度の高いニホンオオカミやツキノワグマ、クワガタムシであったことからもうかがえる。したがって、知名度の低い小型生物の展示には、相応の工夫や仕掛けをする必要があった。
- ・絶滅危惧種が多数存在することを紹介することに重点を置いたため、展示資料が非常に多くなったこと。
- ・展示資料数が多くなりすぎたことにより、個々の資料の解説が行き届かず、焦点が絞りにくくなったこと。過去5年の特別企画展に比べて展示資料が多いにも関わらず、観覧時間が短かったのは、こうした点にも問題があったと考えられる。
- ・絶滅危惧種を生む要因についての解説が不十分であったこと。この点については、例えば、実際に森林が破壊されている映像やビジュアル的な展示を導入するなどの「仕掛け」が必要であったと思われる。
- ・展示の性質上娯楽性に乏しかったこと。
- ・観覧者の絶滅危惧生物に対する知識と企画者のそれについての認識に差があったこと。
- ・展示解説が学問的であったこと。

なお、満足度と難易度のクロス集計結果（第4表）

第2表. 2005年特別企画展内の参加体験型展示「ミッション」内容。

タイトル	内 容
ミッション1 イヌノフグリを識別せよ!	イヌノフグリ・タチイヌノフグリ・オオイヌノフグリ・フラサバソウの各標本からイヌノフグリの番号を回答
ミッション2 ほんもののハマグリをさがせ!	ハマグリ・チョウセンハマグリ・シナハマグリの各標本から、ハマグリの標本の番号を回答
ミッション3 愛知県産ヒラタクワガタをさがせ!	愛知県および東南アジア各産地のヒラタクワガタ標本全6点から、愛知県産個体の番号を回答
ミッション4 オオカミの歯型を入手せよ!	紙粘土を雌型に詰めてとりだす方法で、ハイイロオオカミの歯のレプリカを作製する

第3表. 2005年特別企画展動線調査において観覧者が高い関心を示した「ミッション」。

立ち止まり特によく観覧した「ミッション」 (N=44)	同伴者と会話のみられた「ミッション」 (N=48)	聞き取り調査結果 (N=29)
ミッション3 16	ミッション3 19	ミッション3 16
ミッション1 13	ミッション2 12	ミッション1 6
ミッション2 10	ミッション1 11	ミッション2 3
ミッション4 5	ミッション4 6	ミッション4 4

第4表. 2005年特別企画展観覧者の満足度と難易度のクロス集計 (N=330).

難易度 満足度	難し かった	やや難 しかった	適切	やや物 足りな かった	物足り なかつ た	合計
とても 面白い	30	52	82	6	1	171(51.8%)
面白い	19	37	58	6	1	121(36.7%)
普通	5	7	12	5	1	30(9.0%)
つまら なかつ た	1	0	1	1	5	8(2.4%)

から、「難しかった」または「やや難しかった」と回答した観覧者151人の満足度を比較すると、「とても面白かった」という回答が最多の82人(54.3%)いたのに対して、「難しくつまらなかった」と回答したのは1名(0.7%)にとどまった。一方、「つまらなかった」と回答した8名のうち5名(62.5%)は「展示が物足りなかった」と回答していた。これらの結果は、観覧者が展示内容に難しさを感じながらも興味を持ったこと、また生物多様性保全に対して関心の高い市民が特別企画展会場に多く訪れていたことをあらわしていると思われる。

## 謝 辞

アンケート調査の集計の労をとられた豊橋市自然史博物館嘱託員倉橋勝秀氏、動線調査をお願いした平成17年度博物館実習生諸氏、調査にご協力いただいた多くの特別企画展観覧者の皆様に心からお礼申し上げます。

## 引用文献

- 長谷川道明(編), 2005. 第20回特別企画展展示解説書  
よみがえれ! 愛知のいきものたち. 豊橋市自然史博物館, 87p.
- 豊橋市自然史博物館, 2006. 第20回特別企画展「よみがえれ! 愛知のいきものたち」. 豊橋市自然史博物館年報, (18): 10-14.